

オランダ別段風説書における一八五〇年代のヨーロッパ

割 田 聖 史

はじめに

オランダ別段風説書は、もともとはアヘン戦争の情報収集のために一八四〇年から作成されたものだが、一八四七年以降はヨーロッパ情報を含むようになる。筆者はすでに別段風説書における「一八四八年革命」に関する情報については検討した。^①そこで本稿は、それに続く時期である一八五〇年代の別段風説書におけるヨーロッパ情報を検討していく。

風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』（青山学院大学総合研究所叢書）（吉川弘文館、二〇一九年）（以下、『集成』）の刊行および松方冬子編『別段風説書が語る一九世紀 翻訳と研究』（東京大学出版会、二〇一二年）（以下、松方編）によって、別段風説書の内容が一覧できるようになり、筆者のような西洋史の研究者にも参照が容易となった。一九世紀半ばの日本に、ヨーロッパに関してどのような情報が伝わっていたのかを明らかにすることは、日本の西洋史研究にとっても重要な研究課題でありうる。

本稿は、別段風説書に描かれているヨーロッパの情報を分析するため

に、『集成』の長崎訳・江戸訳および松方編の現代語訳のテキストを用いる。長崎訳・江戸訳・現代語訳は、それぞれ *Apart Nieuws* のオランダ語原文から直接翻訳されたものであり、オランダ語原文オランダに対する訳文それぞれの関係は等価であるといえる。これらのテキストを比較・検討することによって、ヨーロッパ情報を当時の日本がどのように理解したかだけでなく、現代の理解や解釈との比較も可能となるだろう。なお、比較の際に、翻刻されたオランダ語原文も適宜用いる。（なお、引用に際して、『集成』に関しては、長崎訳・江戸訳とページ数のみ記す。松方編に関しては、数字を漢数字に改めた。）

イギリスの歴史家エリック・J・ホブズボーム (Eric J. Hobsbawm) は、一九世紀をフランス革命から第一次世界大戦までの「長い一九世紀」と捉えたうえで、一九世紀を三期に区分する。第一期は市民革命と産業革命に特徴づけられる一七八九年から一八四八年の「二重革命の時代」、第二期は一八四八年から一八七五年までの「資本の時代」、第三期は一八七五年から一九一四年までの「帝国の時代」である。別段風説書

にヨーロッパ情報が現れるのは一八四七年からであり、ここから別段風説書が終わる一八五七年までは、「資本の時代」の始まりの時期に当たる。ホブズボームは、「資本の時代」を、「政治革命が後退し、産業革命が前進した」時代で「経済と技術」の進展が顕著であり、「時代のキーワード」である「進歩」という概念に支えられ、ブルジョワジーが「勝利」した時代としている（ただし、この「勝利」はすぐに終わることとなる³⁾）。別段風説書にもこのような特徴が現れることとなるだろう。

以下、本稿では、1で一八五〇年代の別段風説書の情報全体を概観し、そのうちのヨーロッパ情報の概要を確認することで、検討する対象を限定する。2では一八四八年革命以後のヨーロッパの政治状況を、3では自由貿易をめぐる情報を、4では科学技術の発展に関する情報を確認する。5では、一八五〇年代のヨーロッパの最大の事件であるクリミア戦争について取り上げる。

1、一八五〇年代の別段風説書

本稿で対象とする一八五〇年代の別段風説書の構成全体は表1の通りである。一八五四年以降は、*Apart Nieuws* および別段風説書におよそ国別の項目が示されるようになるが、それ以前については明確な項目分けはないため、松方編の区分に従って項目を記している。また、表1の「最新情報の日付」は松方編の現代語訳を、*Apart Nieuws* の日付は松方編三四二―三四三頁の表を参照している。

表1から情報の伝達にかかる期間について確認しておく。*Apart*

Nieuws の日付」が文書の作成日と考えると、「最新情報の日付」は、アジアおよび *Apart Nieuws* が作成されたオランダ領東インドの情報が多く、作成日から一か月程度前の情報が掲載されている。これに対して、ヨーロッパから情報の到達はより多くの時間を必要とした。一八五〇年から一八五二年までは、ヨーロッパ情報は、およそ半年前のものが最新のものであった。しかし、一八五三年以降、ヨーロッパの最新情報はおよそ三か月前のものと伝達期間が短縮されていることが分かる。これは、後述の電信の影響によるものと考えられる。

当該時期の別段風説書に具体的に表れるヨーロッパ諸国は、オランダ、フランス、イギリス、「ドイツ」、スペイン、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、ロシア、である。また、地域的には厳密にはヨーロッパの外となるが、トルコ（オスマン帝国）、エジプト、アルジェリアも、以下では取り上げる。別段風説書におけるこれらの諸国についての情報の概要は表2の通りである。

以下では、一八五〇年代のヨーロッパ諸国の情報を具体的に取り上げていくこととする。

2、一八四八年の「騒動」の余波

一 欧羅巴諸洲ニ於テハ人民ノ騒動打続候【長崎訳三三七頁】

一 欧羅巴の騒動未タ静まり不申候【江戸訳三五四頁】

一八五〇年に入る前後のヨーロッパは、一八四八年の「騒動」の影響が強く残っており、一八五〇年、一八五一年の別段風説書にそれを見て

表1 1850年代の別段風説書の概要

年号	1850年（嘉永三年）	1861年（嘉永四年）	1862年（嘉永五年）	1863年（嘉永六年）	1864年（安政元年）	1865年（安政二年）	1866年（安政三年）	1867年（安政四年）
	（オランダ） （オランダ領東インド） （中国） （シヤム） （スールー諸島） （喜望峰） （フランス） （航海法） （イギリス領インド） （ドイツ） （オーストリア） （ヨーロッパ情勢） （エジプト） （アメリカ）	（オランダ） （オランダ領東インド） （海賊） （各国海軍） （日本人漂流民） （中国） （マカオ） （シヤム） （ベルマ） （イギリス領インド） （フランス領東インド） （喜望峰） （フランス） （ロンドン万国博覧会） （イギリス） （ドイツ） （ヨーロッパ情勢） （ロシア） （トルコ） （エジプト） （アメリカ）	（オランダ） （オランダ領東インド） （海賊） （中国） （スベイン） （スペイン領キューバ） （ロシア） （イギリス） （オーストラリア） （喜望峰） （オーストラリア） （イタリヤ） （トルコ） （北アメリカ） （喜望峰） （オーストラリア） （各国海軍） （イタリヤ） （日本向けアメリカ艦隊） （エジプト） （ハワイ） （メキシコ） （カリフォルニア） （日本商船長） （海軍） （アメリカ艦隊日本来航情報）	（オランダ） （オランダ領東インド） （海賊） （中国） （イギリス） （フランス） （ドイツ） （オーストリア） （イタリヤ） （トルコ） （北アメリカ） （喜望峰） （オーストラリア） （各国海軍） （イタリヤ） （日本向けアメリカ艦隊） （エジプト） （ハワイ） （メキシコ） （カリフォルニア） （日本商船長） （海軍） （アメリカ艦隊日本来航情報）	オランダ オランダ領東インド領土 イギリス領東インド オーストラリア 喜望峰 中国 グレート・ブリテン フランス	オランダ オランダ領東インド領土 イギリス領東インド 領土 シンガポール ベルマ オーストラリア 喜望峰 中国 グレート・ブリテン フランス	オランダ オランダ領東インド領土 イギリス領インド 中国 グレート・ブリテン フランス	オランダ オランダ領東インド領土 イギリス領インド シンガポール 喜望峰 オーストラリア 中国 グレート・ブリテン フランス
最新のヨーロッパ情報の日付	【1850年2月6日】 ドイツに憲法	【1850年11月29日】 オーストリアとフランスの協約	【1851年12月】 スペイン女王襲撃	【1853年1月29日】 ナポレオン3世の結婚	【1854年3月26日】 パルマ公爵暗殺	【1855年3月】 オランダの大洪水による被害	【1856年3月30日】 パリ議和条約	【1857年4月14日】 イギリス女王出座
最新情報の日付	【1850年5月28日】 中国	【1851年5月12日】 オランダ領東インド	【1852年4月7日】 日本商船長トシクル・クルチウス長任命	【1853年3月24日】 各国海軍「本國版チャイナ・メイル紙」	【1854年6月2日】 オランダ領東インド	【1855年5月11日】 オランダ領東インド	【1856年5月20日】 オランダ領東インド新総督	【1857年6月28日】 オランダ領東インド
Apart Nieuws の日付	1850年6月20日付	1851年6月7日付	1852年6月15日付	1853年6月13日付	1854年6月14日付	1855年6月5日付	1856年7月6日付	1856年7月20日付

オランダ別段風説書における一八五〇年代のヨーロッパ

表2 1850年代の別段風説書におけるヨーロッパ情報

1850年（嘉永三年）	1851年（嘉永四年）
(オランダ) ・【1849年5月12日】 ウィレム3世即位、王室の動向 ・ヨーロッパは反乱の最中だが、オランダは安寧 (フランス) ・ヨーロッパ諸国では動乱継続 ・フランスでは国民感情分裂。特にパリの下層庶民で「社会主義」的党派が台頭 ・フランス共和国の大統領ルイ・ナポレオンのローマ侵攻 ・【1849年5月26日】 立法議会成立 (航海法) ・イギリスの航海法修正 (ドイツ) ・ドイツ諸邦の連合国家構想失敗 ・【1849年5月】 フランクフルト国民議会、シュトゥットガルト移転 ・プロイセン政府、ドイツのための憲法草案作成。エルフルト議会 ・オーストリアの反対は明白 ・【1850年2月6日】 プロイセン王国に憲法 ・いたるところで反乱 ・シュレスヴァイク・ホルシュタイン公国をめぐるドイツとデンマークの間の戦争 ・デンマーク敗北、休戦協定。【1849年7月27日】 6か月の停戦 ・デンマーク、新憲法採択 (オーストリア) ・【1849年3月12日】 サルデーニヤ王国によって休戦破棄 ・フランスとイギリスの仲介中止、軍事行動再開 ・サルデーニヤ国王カルロ・アルベルト退位。ザイトトリーオ・エマヌエーレ即位。 ・【1849年8月6日】 講和条約。ロンバルディア、ヴェネツィアも再びオーストリアに従属。 ・ハンガリーとの戦争。【1849年4月】 ペシエト包囲。コシエートを中心に抵抗 ・【1849年5月】 ロシアの援軍。【1849年7月】 反乱鎮圧。コシエート逃亡 (ヨーロッパ情勢) ・ロシアとトルコは敵対的 ・イギリスとギリシア衝突 ・イタリヤ。トスカナで反乱、ナポリはシチリア鎮圧 ・ヨーロッパ全域にコレラ (エジプト) ・新君主アッバース・バシヤ	(オランダ) ・【1850年6月4日】 【1850年6月】 【1850年11月24日】 王室の動向 ・オランダは秩序と安寧という幸福な状況を楽しんだ ・航海法修正の結果、貿易が発展 ・海水を飲料水にする実験 (フランス) ・【1850年8月26日】 ルイ・フィリップ死去 ・フランスは平穏。「社会主義」的党派は、以前より受け入れられていない。 (ロンドン万国博覧会) ・水晶宮 (イギリス) ・イギリス領インドとバミニングラムの商人によってイギリス政府に提出された請願書 (ドイツ) ・騒乱の継続 ・プロイセンとオーストリア間の危機。【1850年11月29日】 オルミュツ協約。ドレスデン会議 ・ベルリンでプロイセン国王暗殺未遂 (ヨーロッパ情勢) ・シュレスヴァイク＝ホルシュタイン情勢 ・1849年8月6日の講和後、サルデーニヤとオーストリアの衝突は回避 ・サルデーニヤ＝ローマの間の紛争 ・トスカナ憲法停止 ・イギリス＝ギリシア紛争解決 (ロシア) ・コーカサス地域での紛争。ロシア軍が同地を占領 (トルコ) ・反乱があったが鎮圧 (エジプト) ・アッバース・バシヤ、軍隊をヨーロッパ流に編成。軍備費の増大により、住民が困窮

1852年（嘉永五年）	1853年（嘉永六年）
(オランダ) ・【1851年8月25日】【1851年10月31日】王室の動向 ・オランダは安寧を享受 (スペイン) ・【1851年12月】スペイン女王襲撃 (ロシア) ・コーカサス地域での紛争継続 ・来年はロシア1000年 (イギリス) ・【1851年5月】ロンドンで産業博覧会開催。数日で10万人 ・英仏間に電信ケーブル。数分でフランスの情報をロンドンへ (フランス) ・1848年革命に反する趣旨の革命 ・ルイ・ナポレオン・ボナパルトによる強硬な措置 ・陸軍の協力で、議員を逮捕・国外追放。憲法制定。自身への権力付与 (アルジェリア) ・フランス軍によるカビール族攻撃 ・ムーア人によるフランス人略奪。フランス海軍派遣。 (ノルウェー) ・「社会主義」的思想が浸透。騒動が起きたが、すぐに鎮圧 (ドイツ) ・1848年-1849年およびデーンマークとの講和後、安寧 (イタリヤ) ・オーストリア領、ロンバルディアとヴェネツィアにおける反乱鎮圧以来、秩序維持。 - しかし、独立を望む諸勢力は陰謀を画策 ・オーストリアーサルデーニャ間は平和維持 (エジプト) ・エジプトの副王アッバース・パシヤとトルコのスルタンの間に、スエズ地峡に鉄道敷設権限をめぐる争論	(オランダ) ・【1852年12月14日】王室の動向 ・オランダの安寧。貿易・産業の発展 ・10月と11月に嵐 ・教皇がオランダに司教と大司教を任命。住民の反発。大臣賞辞職、新内閣成立。 ・オランダーイギリス間の電線ケーブル敷設開始 (イギリス) ・貿易に影響をもたらす出来事 ・保護貿易の維持か、自由貿易か ・自由貿易派（アバデアーン内閣）の内閣の成立 ・【9月14日】ウェリントン侯爵死去 ・イギリスとアイルランドからの移民増加、オーストラリアとカリフォルニアへ (フランス) ・ルイ・ナポレオン・ボナパルト国民投票実施。皇帝ナポレオン3世即位 ・【1853年1月29日】ナポレオン3世の結婚 ・8月にローマで教皇がパリに来訪のうわさ (ドイツ) ・安寧を享受。北アメリカへの移民増加 (オーストリア) ・【1853年2月】皇帝襲撃 ・オーストリアがトルコとモンテネグロ間の不和に介入 ・トルコとオーストリアは不和。フランスもダーダネルスに艦隊派遣 ・外交ルートで平和裏に解決 (イタリヤ) ・【1853年2月】ミラノで、オーストリアからの解放運動とその運動の敗北 ・他のイタリヤ諸国は平和を維持 (トルコ) ・トルコのエジプトへの借款 ・トルコのスルタンが皇帝の称号を継承 ・トルコとモンテネグロ紛争のその終結 ・トルコとロシアの間の紛争情報

1854年（安政元年）	1855年（安政二年）
オランダ ・【1853年5月19日】【1854年2月2日】王室の動向 ・オランダは安寧。貿易や海運は繁栄 ・オランダと北米合衆国の間における通商航海条約締結 ・オランダ－イギリス間の改定電信の敷設完了 ・風と雷雨の猛威で、船や人々に被害 ・【1854年7月12日】ワシントンにて、オランダとオーストラリア共和国間の通商航海条約 ・グレート・ブリテンならびにアイerland ・1853年秋と1854年初めに沿岸に強風被害。オーストラリアへの移住増加 ・1853年、ダブリンで産業技術の物産博覧会開催 ・イギリス女王、フランス皇帝、トルコを支持し、ロシアに宣戦布告 ・フランス ・1853年、フランス皇帝暗殺未遂 ・パリで、1855年に産業技術の物産大博覧会が開催予定。そのための巨大な建物設営 ・ロシアとの戦争は後述。 ポルトガル ・【1853年11月15日】王室の動向 イタリア ・【1854年3月26日】パルマ公爵暗殺 ドイツ ・ドイツや他のヨーロッパ諸国からの移住、1853年、1854年と著しく増加 ギリシア ・トルコ領ギリシアでトルコに対する反乱発生 ・ギリシアとトルコ間の断絶 ・【1854年2月10日】トルコがモンテネグロの村をギリシア蜂起支持の口実で攻撃 ・【1854年3月14日付】イピロスでの反乱は鎮圧 ・テッサリアやイピロスの盗賊は178カ村を破壊 ロシアとトルコ ・クリミア戦争の詳細 ・スウェーデンとノルウェー ・スウェーデンとノルウェーは中立を宣言	オランダ ・オランダは安寧。貿易や海運は繁栄。 ・1854年末と1855年初頭に嵐。多数の船が沈没。【1855年3月】大洪水による被害 ・王家は繁栄。災害に際し、国王の被害者への気配りに対し、多大な感謝。 ・グレート・ブリテンならびにアイerland ・オーストラリアからの金の供給量が多い。 ・アイerlandは駐留軍が東部へ派遣されたため、30000人の市民軍 ・技師リデル、海底電信敷設のため派遣。 ・イギリス内閣1855年1月末に退陣。ハーバーストン内閣成立 ・フランス ・前便のバリの展覧会は、1855年5月1日に開幕予定。 ・サン・ローレン・デユボン（イゼール県）の小村で火事 ・バリの職人が新型の大砲開発 ・フランスでは徴兵継続 ・スペイン ・【1854年6月28日】反乱発生。エスバルテロ宰相任命、王母追放。 ・秩序回復も、カルリスタによる騒乱と財政的苦境のゆえに懸念。 ポルトガル ・反乱への扇動 ドイツ ・ドイツからアメリカへの移民がますます増加。 ・【1854年10月26日】バイエルン王室、ザクセン王室の動向。【1855年3月5日】オーストリア帝室の動向。 ギリシア ・【1854年5月30日電信】アテネにフランス軍が進撃し占領。国王と王族は当初亡命し、新内閣招集。新内閣はトルコとその同盟国を敵対視しなかった。1854年7月末の知らせでは、イピロスでは再び秩序が戻った。 ・テッサリアでは再び戦闘。 ・トルコ軍はギリシアの商戦に自領の港を再び開放。 ロシア・トルコならびにエジプト ・クリミア戦争続報 ・スウェーデン、ノルウェー、デンマーク ・中立を維持。 ・連合艦隊がバルト海を去って後、スウェーデンの貿易は活発

1866年（安政三年）	1861年（安政四年）
オランダ ・オランダ国内安寧。貿易・航海繁栄。【1855年初頭】アメリカ合衆国との協定。 【1855年6月末】【1855年10月23日】【1855年最後の数か月】王室の動向 - グレート・ブリテンならびにアイerland ・【1855年4月16日～24日】【1855年8月】【1855年11月後半】王室の動向 ・ハラクラザとザラルナ間の海底電信ケーブル敷設。【1855年4月24日】使用可能 ・1855年中のイギリスからアメリカ合衆国及びオーストラリアへの移民、前年より減少 ・【1856年初め】ベルギー国王、イギリス訪問 - スウェーデン、ノルウェーならびにデンマーク ・東方問題について完全に中立 - フランス ・1855年、2回の皇帝暗殺未遂。【1855年5月15日】博覧会開始。同月。【1855年8月】 【1855年11月】【1856年3月16日】、帝室の動向 ・1855年、ベルシアとの間の友好通商条約 - ドイツ ・【1855年半ば】ドイツ南西で地震。ドイツからアメリカへの移住、昨年著しく減少 - スเปน ・スเปนの財政状況は悲惨。【1855年2月】に状況改善。カルリスタ派の反乱継続。 【1855年11月】カルリスタの反乱は完全に鎮圧 ・【1855年3月】マニラの諸港とサンボアング港を貿易のために開放 - ポルトガル ・【1855年9月16日】新国王ペドロ5世即位 - イタリア ・【1855年5月中】ヴェスヴィオ火山噴火 - ギリシア ・略奪行為が続く。【1855年10月】内閣改変 - トルコ ・【1855年初め】【1855年7月】トルコにおける地震 ・【1855年7月】トリポリ地方全域で反乱 ・スエズ地峡の開削問題 - ロシアとトルコ ・【1856年3月30日】パリ講和条約 ・クリミア戦争続報	オランダ ・オランダは国内の安寧を享受。貿易、航海及び産業は発展 ・オーストリアと通商航海条約。スウェーデン・ノルウェー、ハンザ自由都市ブレーメン、オーストリア、プロイセン、ハノーヴァー、ザクセン、サルデーニャ、グレート・ブリテン、デンマークとの協定 ・【1856年5月19日】オランダのフリーマーズン騎士団本部の創立100周年 ・【1856年7月18日】印刷技術の明者ラウレンス・ヤンスゾーン・コステルの彫像の除幕式。 ・王室の動向 ・【1856年9月】ハーグでオランダの織物・手工業組合の第5回年次総会開催 - グレート・ブリテンならびにアイerland ・【1857年4月14日】イギリス女王出産。・外国向けの輸出が増加 ・【1857年】イギリスのベルシア遠征。【1857年3月4日】講和を締結 ・スエバ・グラナダとの外交関係破壊と不睦 ・イギリス艦隊、ロシアとの講和締結以来、軍艦削減。陸軍縮小 ・イギリスと中国の間との戦争になった（アロー号戦争） - スウェーデン、ノルウェーならびにデンマーク ・ラツプランドで飢饉。デンマークの政情不安 - ベルギー ・【1856年7月21日、22日及び23日】王室の動向 - フランス ・【1856年】各地で洪水。・ペリシエ元帥がマクロ公爵に ・フランスとハンブルクの間で、知的文化的成果物の所有に関する条約締結 ・【1857年1月4日】パリ大司教ジボール暗殺。・最近の人口調査 - オーストリア ・【1856年7月12日】【1856年11月4日】帝室の動向 ・オーストリア海軍省の本部をトリエステに設置予定 - プロイセン ・プロイセン海軍の状況・プロイセン王室の動向 - スイス ・プロイセン国王が名目上の君主であるスシヤデル州における争い - スเปน ・反乱と動乱。女王の一派が優勢 - イタリア ・イギリス・フランスとナポリ国王の会談 ・ナポリ国王襲撃未遂 ・オーストリア大公、ロンバルディア・ヴェネチア王国の総督に就任 - ギリシア ・ギリシアに駐留していたフランス軍帰国 ・ギリシアの社会的状況、相変わらず好ましくないまま - ロシアならびにトルコ ・【1856年3月30日】【1856年4月27日】パリで講和条約が調印・批准 ・【1856年4月15日】英仏境の間でトルコの保全のための条約 - ロシア ・ドイツの学校制度の調査。士官養成学校。財政体質の改善と陸海軍の再編 ・ロシア政府、学問的な世界一周旅行を計画 ・自由貿易の支持者と保護貿易体制の支持者の間の対立。自由貿易派が優勢 ・ロシアの中国貿易拡大 ・【1856年9月】ロシアの新皇帝アレクサンデル2世の即位式 ・（ポーランドを除く）ロシア国勢 ・ロシアのコンスタンティン大公のヨーロッパ訪問

取れる。ここでは特に、フランス、「ドイツ」、オーストリアを取り上げる。

2-1 フランス

フランスに関しては、一八四八年の別段風説書で、一八四八年二月にパリで民衆の蜂起が起こり、国王ルイ・フィリップが亡命したことが報じられている。翌一八四九年の別段風説書では、その後の展開が述べられている。一八四八年四月の国会選挙で、穏健共和派、保守派が多数を占めたことで、ブルジョワとプロレタリアートの対立が大きくなった。その結果、六月二二日に、パリ民衆が蜂起した（六月蜂起）。この蜂起をカヴェニャック將軍が鎮圧し、その後、カヴェニャックが行政権の長となった。この間、ナポレオンの甥であるルイ・ナポレオンがフランスへ戻り、九月に国会議員となり、一二月には大統領に当選した、ということまで報じられている。⁽⁴⁾

一八四九年の別段風説書において、一八四八年の六月蜂起の際に、すべての市民に財産を平等に分配することを望む党派（*gene partij, die de bezittingen gelijkelijk onder alle burgers verdeeld of wel alle eigendom afgeschaft wenscht te hebben*）⁽⁵⁾について指摘されている。この党派は、「徒党ヲ結び、都テ國民自己ノ財寶所有ト申儀ヲ相企メ國中上下平等ニ配分致シ度企有之候」（長崎訳三二五頁）、「一組の一揆起り大小府民の金貨を平等に分ち、一個々々の所持せる私利を止んと謀る」（江戸訳三二六頁）と訳されている。これは、現在では、「社会主義」「共産主義」と

いった概念でまとめられるものであろう。（なお、表2においては、「社会主義」的党派としてある。）

翌一八五〇年の別段風説書においても、この「党派」「徒黨」「一揆」について触れられている。

【長崎訳三三七頁】

一「フランス」国ニ於テハ土人ノ意、同カラス候

一右土民ノ内一致イタシ土人所持ノ品物ヲ平等ニ配分ノ企致シ候得共、嘉永元年五月右ノ存念空敷相成候処、当時又々其萌有之候一就中「パレイス」^{（邦理）}フランスノ住民共右一致ニ荷担致シ候モノ有之候得共、多分ハ下賤ノ者ニ有之候

【江戸訳三五五頁】

一弘郎西国^ル於ては民心未タ一致せさりし

府民を平等^ルし金貨を分配せん事を計りて一揆を起シ、既余千八百四十八年第六月（嘉永元年五月）^ル於て大余敗走せる徒党、尚又漸々^ル勢を得申候

殊ニ首府把理斯^ル於ては、右の徒多の属徒を得たり、殊ニ下賤なる者多く此^ル組ミセリ

こゝでは、「徒党」「一揆」が、特にバリの下層民の間で支持を得ており、世論の分断を招いていることが記されている。しかし、翌一八五一年の別段風説書には、その賛同者が減少している様子が示されている。⁽⁶⁾ また、一八五二年の別段風説書のノルウェーにおいても、この「社会主義」的党派について述べられている。⁽⁷⁾

フランスの国内情勢全般については、一八五〇年の別段風説書に、一八四九年六月にパリとリヨンで蜂起計画があったこと、フランス大統領ルイ・ナポレオンが、ローマを追放された教皇ピウス九世の帰還を支援するためにローマへ侵攻したこと、一八四九年五月に憲法制定国民議會は解散し、立法議會の選挙が行われたことが記されている^⑧。

このような状況を受けて、一八五一年の別段風説書においては、「當時フランス国も先づ静謐有之」(長崎訳三七六頁)、「此時人心到て静謐なり」(江戸訳三八七頁)、と状況が落ち着いていることが示されている。

しかし、一八五一年二月二日に大統領ルイ・ナポレオンは、クーデターが起こり、行政権と一部の立法権を掌握した。そして、一八五二年一月に国民投票が行われ、ルイ・ナポレオンは、一八五二年二月二日皇帝ナポレオン三世として即位した。この様子については、一八五二年および一八五三年の別段風説書で知らされている。一八五四年の別段風説書には、ナポレオン三世の暗殺未遂、パリの万国博覧会の開催予定、ロシアとの戦争(クリミア戦争)について述べられている^⑩。クリミア戦争については後述する。

2-2 「ドイツ」とオーストリア

一八四九年の風説書には、分裂状態であった「ドイツ」に関して、フランクフルト国民議會による統一事業について、さらに、フランクフルト国民議會がプロイセン国王をドイツ皇帝に選出することを決めた(一八四九年三月二八日)が、プロイセン国王が拒否したこと(四月三日)

が記されている。

一八五〇年の風説書にはその後の展開が記されている。

【長崎訳三三九頁】

一「ドイツ」国ハ数多ノ郡有之候ニ付、共和政治ノ国ニ致シ度存念候処、其儀終ニ相遂不申候

【江戸訳三五六頁】

一独逸国ハ幾多の各異の邦分られたる国尔して、近頃これを一個の共和政治と為せんと勉強セしが、竟尔これを遂ぐることを得ざりし

とフランクフルト国民議會のドイツ統一事業の失敗と評価した後、フランクフルト国民議會の事実上の解散とシュトゥットガルト移転についての顛末が述べられている。

ここでは、諸邦が統一されて出来上がるであろう「ドイツ」の政体を「共和政治」と訳している。しかし、「ドイツ」の場合、君主がいることが分かっており、ここでの「共和政治」は、現在のような君主制に對置される概念とは異なっていることは注目されるべきである^⑬。

このため、ドイツ統一事業の主導権は、市民主導のフランクフルト国民議會から、君主主導へと変化していく。最初に主導権を握ろうとしたのが、プロイセンであった。プロイセン政府は、「新ニ取極「ドイツ」國中ニ施シ候」(長崎訳三三八頁)、「独逸国治め方の一新制を告明セリ」(江戸訳三五七頁)と記されているように、オーストリアを除く諸邦がらなる「連合」を模索した^⑭。この連合は、「エルフルト連合」と呼ばれ、

憲法も作成された。¹⁵⁾プロイセンの「連合」政策に対して、オーストリアは強く反発した。

翌一八五一年の別段風説書には、ドイツ統一をめぐって、プロイセンとオーストリアの不和は、軍事的衝突になりかけたことが記されている。最終的には、オーストリアがロシアの支持を得ることに成功した。そして、一八五〇年一月二九日に、オーストリアとプロイセンでオルミッツ協約が締結された。これにより、プロイセンは、この時点におけるドイツ統一構想を放棄することとなった。このオルミッツ協約は、ドイツ統一を求めた人々から「オルミッツの屈辱」と呼ばれる。この後、ドレスデンにおいて会合が催されたことまでが別段風説書に記されている。¹⁶⁾

オーストリアについては、一八四九年の別段風説書において、一八四八年革命の際に、皇帝フェルディナント一世が五月にウィーンを一度退去し、クロアチア軍との連合で、一〇月にウィーンを回復したこと、ハンガリー軍との戦闘、一二月に新皇帝フランツ・ヨーゼフが即位したことが報じられていた。

一八五〇年の別段風説書では、オーストリア軍とサルデーニャ王国の争いが記されている。サルデーニャ王国が敗北し、国王カルロ・アルベルトが退位し、ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世が即位した。一八四九年八月六日に講和が結ばれた。

ハンガリーとの争いは、ロシア軍の支援を得て、オーストリアが勝利し、指導者のコシュートは亡命したことが記されている。¹⁷⁾

ハンガリー蜂起の鎮圧によって、「一八四八年革命」は最終的に終結する。このあと、政治情勢が落ち着いたためか、「騒動」のあった三国の国内情報は乏しくなっていく。

3、「安寧」「静謐」「繁昌」と「自由貿易」

オランダの項は、別段風説書に先頭に常に置かれ、国内は常に「安寧」「静謐」の状態とされる。この語は、オランダ語の *rust* を翻訳したものであり、一八四八年の別段風説書以降、毎年用いられている。¹⁸⁾そして、この「安寧」「静謐」が「望ましい」(*gewunschte*)と書かれている。ただし、これが誰による評価なのかは明らかではない。

「安寧」「静謐」のほかに、一八五二年の別段風説書以降は、「繁昌」(*eene bloeyende/bloeiende toestand*) という評価が加わることとなる。「繁昌」というのは、「商業」(*handel*)・「産業・工業」(*nijverheid*)・「航海」(*scheepvaart*) についての評価である。¹⁹⁾この評価に影響しているのは、オランダに関しては、一八五一年の別段風説書の記事にあるイギリスの航海法の改正に従って、オランダも同様な方針をとったことであつた。

【長崎訳三六二―三六三頁】

一 エゲレス国船乗掟の儀付、以前の通に相改候儀昨年来の説書有之候

一 阿蘭陀国及び其他欧羅巴の国々船乗掟の義、是亦エゲレス国の振合准し、猶商売参居候先々亦ても、其国々のもの自国同様の

心得の趣尔候

一 右の振合尔相成候以来商売方大に繁昌いたし、諸荷物の直段一体
尔引下け、国中折合宜敷、欧羅巴州中以前尔競ひ候へハ安寧尔相
成申候

一 欧羅巴州国々の諸領とも同様安寧尔相成申候

【江戸訳三八二頁】

一 英吉利航海交易の制度を改革す、和蘭及其他的欧邏巴諸藩も皆
これ尔倣ひて貿易の制度を改む、他国尔往て交易すれとも自国の
者と異なる事なし

此制度行ハれし以来物価低下物品饒夥^(マ)をなり、民皆其利を享け各
国政堂は争乱^ルて——多事といへとも民人は生理昔日尔比すれハ
頗る豊足せり、各国植民の諸地の人も其沢を享て同しく其利尔依
れり

ここでは、イギリスに従って、オランダをはじめとした諸国も各国の
航海法を改めたこと、それによって、各国の国民が相手国で同等の権利
を持つとされている。この結果、貿易が発展して、物価の低下をもたら
し、各国の植民地も含めて、その利益を享受しているとする。

イギリスに関しては、一八五〇年の別段風説書に、航海法修正の記事
が掲載されている。

【長崎訳三三七—三三八頁】

一 当年「エゲレス」国ニ於テハ航海方ノ儀ニ付規定ヲ相改候儀有之
候

オランダ別段風説書における一八五〇年代のヨーロッパ

一 右ニ付諸出入ノ運上ヲ大ニ減少致シ、且差止候个条モ有之候
一 「エゲレス」国ニ於テハ外国ト自国トノ差別無之、何レモ平等ノ
取計ニ候

一 右規定ハ欧羅巴諸洲商売方ノ利徳ト相成ヘキ儀ニ候

一 欧羅巴諸洲ハ交易方ノ儀多分何レモ同様ノ振合ニ候

【江戸訳三五五—三五六頁】

一 同年英吉利尔於て其航海の法律を改革仕候

出賃入賃の租銭大ひ尔減し、且一、二の品物尔ハ全く租を除きた
り

他邦の民人及ひ船、英吉利国尔於ては英吉利本国の人と同様の免
許を得たり

右の掟は欧羅巴諸国交易の為尔ハ有益なる定めに有之候

欧羅巴諸国の人民交易の事尔於ては、互尔同一の自由を得るに至
るへし

航海法は複数回にわたって制定されてきた。特に、一六五一年の航海
法は、イギリスに商品を運ぶのをイギリス船か産出国の船に限定する自
国の利益保護のための貿易統制法であり、当初は事実上オランダの中継
貿易の妨害を狙ったものであった。一九世紀に入ると、自由貿易論者が
台頭したことで、一八四九年と一八五四年に修正・廃止された。一八五
〇年の記事は、一八四九年の改正について述べられている。さらに、一
八五三年の別段風説書は、イギリスにおける自由貿易に関する議論につ
いて触れている。

【オランダ語】²⁰⁾

In Engeland is in het afgelopen jaar eene gebeurtenis voorgevallen die van grooten invloed op den handel van dat land zal zijn.

Reeds sedert eenige jaren wel[d dat] land een parlementaire strijd gel[] over de vraag, of de handelsstaatkunde van dat rijk; het stelsel van bescherming, dat is, toekenning van voordeelen aan de inlandsche nijverheid (handel en scheepvaart daaronder begrepen) [ven die van de vreemde; dan [] een stelsel van vrijen handel dat is van gelijke behandeling vorderde.

Dit pleit is thans in beginsel beslist, en ten voordeele van den vrijen handel uitgewezen. Een ministerie dat men verdacht hield van de beschermende reglen te zijn toegegaan, moest plaats maken vo[or] een ander, van eene tegenoverstelde kleur.

【長崎訳四二五—四二六頁】

一 昨年エゲレス国²¹⁾於て起り候事有之候、右は多分商売筋²²⁾於拘り候儀²³⁾可²⁴⁾有之候、既²⁵⁾尔近年彼国²⁶⁾於て左の尋問²⁷⁾於付評論差²⁸⁾発²⁹⁾り候

国中商法の規定只自国の利益を専³⁰⁾いたし候哉

外国一同利潤の差別無之候哉

右評論外国一同利潤の差別無之候様相決候

一 自国の利益を専³¹⁾いたし候規定相改り候

自由貿易（自由な貿易（vrije handel））は、国内産業の利益を擁護する保護貿易と対置され、他国の利益も自国と同様に扱ふこととされている。

自由貿易を展開するイギリスは、その貿易活動が伸長することとなる。一八五七年の別段風説書には、戦争にもかかわらず、外国向け輸出増加六九〇〇万ポンド輸出入が伸び、いまだかつてない数字となっていること、他方で、植民地向けは減少したことが報告されている。²¹⁾

また、ロシアの項でも、自由貿易（vrije handel）について触れられている。この語は、長崎訳では「フレイハンドル」と訳され、割注で「政府江者租税を出し商人相互の商法をいふ」（長崎訳五〇七頁）、江戸訳では「公商」と訳され、割注で「政府に租税を出し交互貿易をする云」（江戸訳五二七頁）と説明されている。自由貿易が「政府に租税を出す」となっているが、このような理解は適切とはいえないだろう。

別段風説書では、ヨーロッパ全域で、「自由貿易」が勝利していくさまが描かれている。少なくともオランダ語原文の Apart Nieuws の作成者は、「自由貿易」をこのように取り上げることから、この傾向に肯定的であると考えられる。

4、科学技術の発展と世界の一体化

一八五〇年代の別段風説書におけるヨーロッパ情報には、科学技術の発展と世界の一体化に関する記述も見とれる。

一八五一年のオランダの項では、海水の淡水化実験について触れられている。²²⁾ 海水淡水化自体は、古代からその技術が求められており、実験が行われていたが、一八五〇年代の特徴は、蒸気機関を使用したことである。²³⁾ ただし、この時期にオランダで行われた実験が何を指してい

るのかは正確には分らない。

また、一八五五年のフランスの項では、新型の大砲が開発されたことが報告されている。⁽²⁴⁾この大砲は、一二ポンド榴弾砲（ナポレオン砲）と考えられるが、詳細については不明である。

このように、この時期は、発明・技術革新が陸続と起こっていたのである。

4-1 万国博覧会

一八五一年の別段風説書のイギリスに関する項において、万国博覧会について触れられている。

世界中から集めた物品を展覧するための「場所」（長崎訳三七六頁）、
「大場屋」（江戸訳三八七頁）が、クリスタル・パレス（水晶宮）である。⁽²⁵⁾クリスタル・パレスの材質（ガラスと鉄）と規模（長さ・幅・重量・面積）については具体的に触れられているが、その際に「ドワルスシキップ（船の一種）」（長崎訳）、「ドワルスシキップ不詳」（江戸訳）という言葉が訳されていない。松方編においては、「袖廊」と訳されており、これが *dyarschip* という語であることが分かる。「袖廊」は、クリスタル・パレスに関しては、主廊下を横切る副廊下のことを指している。別段風説書では「其家の中央高サ百八フートのドワルスシキップ（船の一種）を居へ」（長崎訳）「ドワルスシキップ不詳を以て其屋を画断す」（江戸訳）と構造について述べられているが、長崎訳は構造をどのようにとらえているかは分らない。科学技術の具体的な事例については、翻訳に苦心

オランダ別段風説書における一八五〇年代のヨーロッパ

していたことが読み取れる。

一八五二年の別段風説書には、ロンドン万国博覧会が一八五一年五月一日から一〇月まで開催されたこと、見学者の総数が一〇万人に及んだことが述べられている。⁽²⁷⁾

この後、一八五四年のイギリスの項にはダブリンで産業技術の物産博覧会、一八五四年から一八五六年のフランスの項にはパリでの万国博覧会、ヨーロッパ外でも一八五三年から一八五四年のオランダ領東インドの項にはバタフィアにおけるオランダ領東インド製品の博覧会、北アメリカの項にはニューヨークにおける博覧会について触れられている。

世界中・国内中から物品を集め、展覧するという博覧会という形式が急速に一般化していったことが見て取れる。

4-2 国際電信

一八五〇年代の重要な技術革新は、国際電信の整備により、通信網の形成である。電信技術は、一八三〇年代には開発されていたが、一八五〇年代は海底電信ケーブルの敷設により、国際電信網の形成が始まった。一八五二年の別段風説書にその記事が掲載されている。

【オランダ語⁽²⁸⁾】

In het laatst van dit jaar ist er eene versnelle gemeenschap tusschen Engeland en Frankrijk geopend door een electromagnetische telegraaf, welke over den bodem der zee-enge, die Engelanden cheiden, heen loopt. Die Kabel, die dezen vereeniging doorstelt is 24 Engelsche mijlen

(ongeveer acht uren gaans) lang en weegt meet dan 200 ton.

Door de verbinging van deze, met de Engelsche en Fransche telegrafen is men [f. 5 r.] in staat om binnen zeer weinige minuten een tijding van Frankrijk naar Engeland's hoofstandoverbrengen.

【松方編二四二頁】

本年末には、イギリスとフランスとの間に、より速度を増した連絡手段が開かれた。それは、イギリスを分け隔てている海峡の底を通ずる電磁氣を用いた電信によるものである。この結合をもたしたその〔電信〕ケーブルは、長さが二四イギリス・マイル（歩いて約八時間の道程）あり、二〇〇トン以上の重量がある。これらのイギリスとフランスの間の電信連絡によつて、人々は、ほんの何分かのうちにフランスの情報をイギリスの首都に送信することができる。〔ようになつた〕。

【長崎訳三九三頁】

一先頃エケレス国とフランス国と迅速の通路を開候、右仕組はエケキトロマグ子ティーセテレグラフエレキトの氣有合図致し候仕掛有之、海底を通り兩國往来いたし候

一右通路用ひ候器具は、長サ二十四エケレスマイル凡阿蘭八時行有重サ二百トン有之候、此仕組の合図有て暫時の間にフランス国よりエケレス国の都府有伝通達致し候

【江戸訳四〇四頁】

一当年の末有て英吉利と払郎察の間の海峡底を通ずる「エレキト

ロ、マグ子チセ」機関の名の合図を以て、速尔信を通ずる装置を成し申候

其合図を為す大綱ハ、英吉利の里法有て二十四里我九里半凡そ八小時行の長き有して、二百噸我五万一千二百貫目余の重さに御座候、此英吉利と払郎察の聞有用ひたる合図有よりて、一、二分時の間有払郎察の風聞英吉利首都有通し申候

een electromagnetische telegraaf」は現在では、電信と訳されるが、当然のことながら、当時の日本にそのような機械・概念はなく、「エケキトロマグ子ティーセテレグラフ」（長崎訳）、「エレキトロ、マグ子チセ」（江戸訳）とカタカナで表記されている。さらに、「ケーブル」（Kabai）についても、当時の日本にはないもので、「右通路用ひ候器具」（長崎訳）、「其合図を為す大綱」（江戸訳）と訳されているが、その翻訳に苦心していることが分かる。江戸訳は形状としては近いといえるだろうが、その構造と重要性についてはおそらく理解されていないだろう。²⁰⁾

一八五三年、一八五四年の別段風説書のオランダの記事には、イギリス・オランダ間にケーブル敷設が記されている。ここでは、電信は、「エレキトロマグ子ティーセテレグラフ」火急有事柄を告知せしむる仕掛の義（長崎訳四二四頁）、「エレキティーリーセテレグラフ与申合図の趣向」（長崎訳四四一頁）と表現されている。また、ケーブルは、一八五四年の別段風説書において、「ケーブル綱と訳す、右仕掛二相用候もの、義哉」（長崎訳四四一頁）となっている。

さらに、一八五五年の別段風説書のイギリスの項には、クリミア戦争中の「貌利太尼亞のインゲニウル武器製作家名は、テレグラフ合図を仕掛

バラクラファ地よりハルナ地に海中を通して設候儀、貌利太尼亜奉行の命を請け東方に發足いたし候、此仕掛有之候ハ、キリム地人々ロンドン^都府^都の便一時間余に可得通候」(長崎訳四六一頁)と、クリミア戦争の戦地の重要拠点であるバラクラヴァからヴァルナへの電信が計画され、ロンドンへの情報伝達にかかる時間が大幅に短縮されることが予想されている。そして、一八五六年の記事には、この電信ケーブル敷設が完了したことが示されている^③。

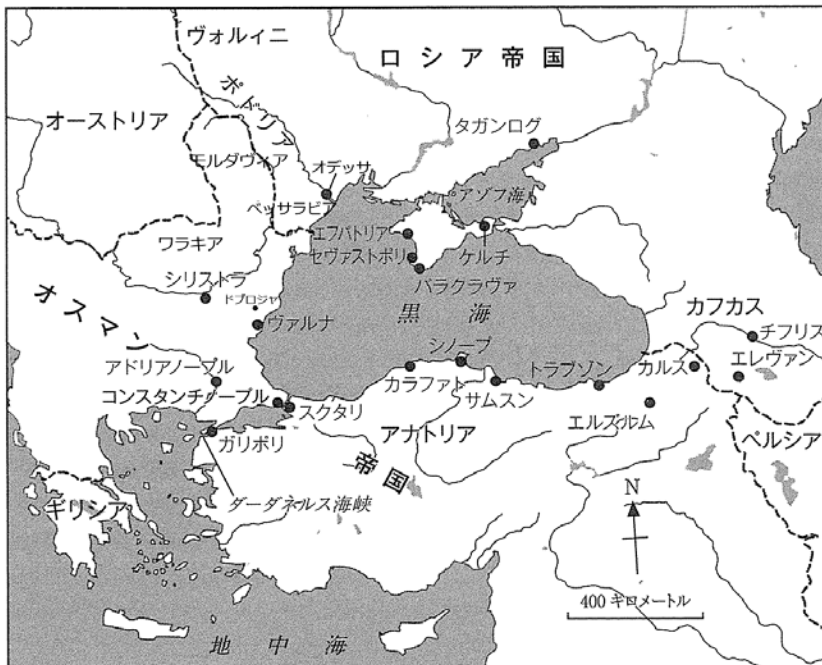
別段風説書の記事においてさえも、海底電信ケーブルが最初に敷設されてからわずか数年のうちに、国際的な電信ケーブル網が拡大していく様子が見てとれる。特に、戦地であるバラクラヴァーヴァルナ間の電信ケーブル敷設からは、国際電信が誕生してすぐに、その有用性が認識され、軍事的に利用されていることがわかるだろう。

5、クリミア戦争

一八五〇年代のヨーロッパにおける最大の政治的事件はクリミア戦争である。クリミア戦争は、ナポレオン戦争以降のヨーロッパの国際体制を支えていた五大国(イギリス、フランス、オーストリア、プロイセン、ロシア)が、相互に直接的に武力衝突した初めての戦争であった。クリミア戦争の期間は、一八五三年一〇月五日から一八五六年三月三〇日の長期に及び、別段風説書においても数年間にわたって記事がある。以下では、別段風説書の記述に沿って、情報を補足しつつ、内容を見ていくこととする。

オランダ別段風説書における一八五〇年代のヨーロッパ

地図1 黒海周辺の戦争関連地域



(出典：オーランド・ファイジズ『クリミア戦争』柴谷徹訳(白水社、二〇一五年)所収の地図「東方問題の紛争地帯」を元に著者が地名を加え作成した。)

一八五三年の別段風説書
一八五三年の別段風説書から、この争いについての情報が掲載され始める。

地図2 「クリミア戦争」関連地図



【長崎訳四二七頁】

一 当時の風説³¹では、トルコ国とロシヤ国との取合相起申候、ロシヤ国はモンテ子ゴローを借地³²致し度相望候
一 其他欧羅巴の支配向も此落着³³相聞候儀有之候

【松方編二五九頁】

最新の報道は、トルコとロシアの紛争を報じている。ロシアは、とりわけモンテネグロに対する宗主権と、トルコ国内のキリスト教徒の信仰の自由を要求している。それにより、トルコ内は大きな混乱となった。首都（コンスタンティノープル）ではキリスト教徒の生存が脅かされ、既にもう一つの都市ブルサでは反乱が起きたようであり、その際数名のキリスト教徒の命が失われた。ほかのヨーロッパ各国政府は、この成り行きを緊張して見守っている。

松方編における訳と比較すると、長崎訳には、オランダ語原文にはある「トルコ国内のキリスト教徒の信仰の自由」(vrijheit van godsdienst voor de Christenen in het Turkesche rijk)⁽³¹⁾については全く触れられていないことが分かる。宗教的な問題は、クリミア戦争の勃発の主要な原因の一つとされるため、長崎訳において翻訳されていないことは検討に値するだろう。⁽³²⁾

一八五四年の別段風説書

翌一八五四年の別段風説書は、戦争の勃発を知らせている。

【長崎訳四四七頁】

一魯西亜国とトルコ国との一件ニ付ては、昨丑年別段風説ニ申上候以来弥以事相募申候、此合戦ルて許多流血ニ及ひ候程の儀ニいたり、人命数多相損シ申候

続いて、一八五三年一月三〇日のシノープの海戦について知らせている。このシノープの海戦は、ロシア軍がオスマン軍を一方的に破った上に、シノープの港湾施設を完全に破壊した。戦いがあまりに一方的であったこと、ロシア軍が助けを求める者までも砲撃したことで、「虐殺」ととらえられ、英仏世論が参戦への傾く契機となった。⁽³³⁾ただし、英仏世論の動向については、別段風説書では触れられていない。

続いて、別段風説書では、アハルツィヘ (Akhalsikhe、現ジョージアの都市) 近郊で、トルコ軍がロシア軍に敗北したこと (アハルツィヘの戦いか)、イギリスとフランスのオスマン側での参戦、英仏の黒海艦隊の戦力、英仏露のバルト海における艦隊戦力が示される。

ここまでの戦況から、「此度の合戦ル付ては、行末幸不幸の程もいまた計難く、其際限も聊以いまた見へす」(長崎訳四四九頁)と状況がいまだに不明確なこと、戦争の影響がヨーロッパの交通・貿易に及んでいることを記している。このように戦争への「客観的」な状況説明を行っているのであるが、この状況説明をしている主体は誰なのかは定かではない。

この後も戦況についての記述が続く。オスマン側にはエジプトが増援を送り、ロシア軍はワラキアへ集結し、カラファト (現ルーマニア南部) ではオスマン軍が勝利した。四月上旬には、ロシア軍がドナウ川を

渡り、オスマン軍に勝利した。

四月一〇日のトリエステからの電信では、イギリス、フランス、オーストリア、プロイセンが議定書に調印したことが知らされている。

四月二二日には、イギリス・フランス連合艦隊がオデッサを砲撃した。シリストリア (現ブルガリアのドナウ川沿岸地域) はロシアに攻め落とされたが、カラファトではオスマン軍が再び勝利した。ドブロジャ (ドナウ河口から黒海への地域) ではロシア軍に赤痢にかかっている。さらに、シルカ (現ルーマニア・ヤシ県の村) からは住民によってロシア軍が追い出された。

一八五五年の別段風説書

一八五五年の別段風説書における戦争の叙述は非常に多い。

ロシアとトルコの項でまず触れているのが、一八五五年三月二日のロシア皇帝ニコライ一世死去、アレクサンドル二世の即位である。

その後、再び戦況の推移であるが、黒海沿岸の戦いは、次第に焦点がセヴァストポリへと集中してくる。

まずは、全体の概要である。一八五四年四月二二日のオデッサの砲撃の後、英仏艦隊はセヴァストポリ向かった。また、六月には再度オデッサが砲撃された。

英仏艦隊は、一八五四年七月に白海でラップランド、八月にはバルト海でロシアのボマーズント要塞を攻撃した。

再び黒海沿岸に戻り、モルダヴィア、ワラキアでは絶え間なく戦闘が

継続した。

一八五四年四月二〇日には、オーストリアとプロイセンは攻守条約を締結した。

この間、ロシア軍がドナウ右岸のシリストリア要塞への攻撃を開始したが、すべて撃退され、六月に撤退した。この結果、戦線は、ドナウ河口、ドブロジャの近郊のみとなった。他方で、この時期には、英仏艦隊はヴァルナ港に集結し始めていた。

ここで、コーカサス地方に目が向けられる。ロシアは以前から、コーカサス地域の支配を目指し、この地域での戦闘を繰り返してきた（コーカサス戦争）。そのため、ロシアは、この地域にも軍隊を駐留させていたが、この時点で一旦駆逐されたことが述べられている。（ただし、コーカサス戦争はこの後一八六四年まで継続する。）

再びセヴァストポリに目を移し、英仏軍は、要塞を北側から包囲する作戦を立てると同時に、南方にあるバラクラヴァ港を占拠し、拠点とする計画を立てた。ヴァルナに終結した連合軍は、セヴァストポリの北にあるエフパトリア（現ウクライナのイエフパトリーヤ）へ向けて進出し、九月一三から一六日に上陸が完了した。そこからセヴァストポリへ進撃し、ロシア軍とアルマ川沿岸で戦闘となった（アルマの戦い、九月二〇日³⁵）。さらに、連合軍は、セヴァストポリの後方へ回るために、バラクラヴァを奪取した。これにより、セヴァストポリは一部包囲された（ただし、北と東は包囲されておらず、内地とは自由に通行していた）。一〇月一七日からセヴァストポリ要塞への砲撃が始まった。一〇月二四

日、二五日にロシア軍が連合軍に向かって進撃し、激しい戦闘となった（バラクラヴァの戦い³⁶）。さらに、一一月五日、セヴァストポリのロシア軍が南へ向かって出撃し、インケルマン渓谷で連合軍と衝突し、連合軍がロシア軍を撃退した（インケルマンの戦い³⁷）。一一月一三日には、ロシア軍がエフパトリアを攻撃したが、撃退された。

秋から冬にかけて、コレラが猛威を振るった。また、天候も悪く、一月一四日、一五日には、嵐により連合軍の船が沈没した。また、陣営の衛生状態が悪く、一八五五年二月の時点で、連合軍は、陣営やコンスタンティノープルやヴァルナの病院に一万八〇〇〇人の患者が収容されていた。一八五五年二月、三月になってようやく、状況の改善がされていた。三月から四月にかけて、セヴァストポリ要塞への攻撃が開始された。三月一六日、一七日の攻撃により、ロシア軍の総司令官メンシコフが死亡し（実際には死んでいない）、ゴンチャロフがロシア軍の総司令官となった。

このように状況をまとめた上で、

【長崎訳四七三頁】

一推考致し候に、デキリム^{地名}に当時魯西亜勢凡二十万、啖咭喇、朗西、都児格勢凡十六万人可罷在、其対戦及び軍勢兵船軍用其外金銀夥しく損毛の後、同盟方はセバスポル^{地名}を手尔入候儀相叶候哉いまた不分明に有之候、右ニ付防禦方の剛強なる事は大凡記録中尔も類例無之候程の儀尔御座候

【松方編三〇一頁】

クリミア半島には現在、二〇万人以上のロシア軍と一六万人のイギリス、フランス、トルコ軍がいると推測されている。あらゆる大量殺戮、あらゆる人間、船、戦争物資、大量の戦費の喪失を経ても、連合軍がセヴァストポリの奪取に成功するかどうかは、いまだ定かではない。こうした粘り強い〔ロシア軍の〕防衛は史上ほとんど例がない。

とロシア側の「剛強なる事」を評価している。

ここで、場面が転換し、英仏海軍が「カムシカットカ」（カムチャツカ半島）にある「ペトロパウロフスキ」（ペトロパヴロフスク要塞）へ向かったことが述べられる。この際は、防衛側が英仏海軍を撃退すること成功している。

最後に、ウィーンでの講和のための交渉が継続していることが述べられている。

一八五六年の別段風説書

一八五六年（安政三年）の別段風説書にもさらに続報がある。

ロシアとトルコの項の冒頭に、「此両国并西方の国々と和談有之候儀先肝要の申上事ニ御座候」（長崎訳四八七頁）とあり、一八五六年三月三〇日にパリで講和がなされたことが示されている。

そのうえで、前年からの状況の続報が示される。特に重要なのが、一八五五年九月八日にセヴァストポリの「南手」を連合軍が占領したことであるとしている。

オランダ別段風説書における一八五〇年代のヨーロッパ

その詳細に入る前に、他地域の状況を確認する。バルト海、白海において連合艦隊は砲撃を行い、港を封鎖したが、戦闘は既に終わっており、艦隊は帰港している。

ロシア南部へ目を向けると、一八五五年五月にケルチとイレニカレへの遠征が行われた³⁸。また、アゾフ海の制海権を連合国側が掌握し、ロシア軍の補給を妨害した。

ここからセヴァストポリに目を向ける。一八五五年六月六日、セヴァストポリへの砲撃が再開された。六月一七日に、重要陣地であるマラコフ砲塔への攻撃を行ったが、翌日には失敗した。ロシア軍は七月一日、一六日、また、八月一六日にはチェルナヤで連合軍を攻撃したが、撃退された（チェルナヤの戦い）³⁹。

連合軍は、八月一七日からセヴァストポリを再度攻撃、さらに九月五日から八日まで再び攻撃を行った結果、九月八日午後、セヴァストポリが占領された。なお、最重要拠点であったマラコフ砲塔はフランス軍によって占領された。なお、セヴァストポリの北側では、戦闘はしばらく継続した。

他方、アナトリアのカルス要塞は、ロシア軍によって包囲されていた。一八五五年九月二九日にオスマン軍がロシア軍に攻撃を行ったが、その後も包囲が続いた。その結果、カルス内で食料が欠乏し、一一月二九日に降伏した。

その後も戦闘は続いたが、一八五六年一月からオーストリア、フランス、イギリスがロシアと和平交渉を始めた。オーストリアによって四つ

の条件が示された。一、ロシアによるワラキア、モルダヴィアの保護の放棄、二、ベッサラビアの放棄、三、黒海の中立化、四、オスマン帝国支配化のキリスト教徒の共同保護。この条件に対して、ロシアはさらに条件を示したが、最終的にはこの条件を受け入れた。二月二五日からパリで会議が開催され、ロシア、オスマン帝国、フランス、イギリス、サルデーニャ、オーストリア、プロイセンの代表が参加した。結果として、三月三〇日に講和条約が調印された。

最後に、カムチャツカのペトロパヴロフスク要塞を一八五五年五月に再び連合小艦隊が攻撃しようとしたが、その時にはすでに要塞が放棄されており、その施設を破壊したことが記されている。

一八五七年の別段風説書には、パリでの講和条約とその内容が示されている。

以上が、別段風説書におけるクリミア戦争の概要である。

クリミア戦争は、バルト海、クリミア、バルカン半島（主にドナウ河口地域）、コーカサス、極東、白海など、世界各地で戦われた。別段風説書には、これらの諸地域の戦争が記されている。また、戦争継続のさなかに行われていた大国間の講和へ向けた外交交渉、中立国の態度についても記されている。

クリミア戦争の結果・勝敗については、別段風説書に直接的な判断は記されていない。ロシア側から見れば、極東・白海は、戦争の結果に重大な影響を与えることはなく、バルカン半島での戦いは、何の成果も得られないまま終わった。バルト海の作戦は引き分け、クリミア戦線は敗

北し、コーカサス地域の戦線は勝利といえることができる。ただし、一八五五年一月にロシア軍が獲得したカルスは、セヴァストポリに比べて、戦略的重要性はるかに劣っていたため、全体のバランスはロシアに有利ではなかったと評価される。⁴⁰⁾

クリミア戦争の死者について、別段風説書においてしばしば触れられていたが、全体的な数については明らかにされていない。バウムガルトによれば、フランス軍はおよそ一〇万人、イギリス軍は二万二〇〇〇人、ロシア軍四〇万六〇〇〇人、サルデーニャ二二〇〇〇人、トルコ軍四万五〇〇〇人で、全体でおよそ五十三万三三〇〇人とされている。⁴¹⁾

極東にあるペトロパヴロフスク要塞の戦いについては、一八五五年、一八五六年の別段風説書ともに、各地の戦況の最後に触れられている。これは、日本向けの情報であるための配置であると思われる。なお、ペトロパヴロフスク要塞へ攻撃を行った英仏艦隊は、ペルーのカヤオ(Callao)に駐留していた艦船であった。エクアドルやチリ、ペルーの政情不安にあり、そこに行った投資、また、ゲアノや銀などの貿易を保護するために、イギリス、フランス、アメリカ合衆国などの軍艦が集まった。これが、クリミア戦争勃発時には多くの連合軍軍艦が南米を拠点とした理由であった。⁴²⁾ クリミア戦争は、「クリミア」という局地の戦いというだけではなく、世界中を戦場とした「帝国」の戦争でもあったのであり、当時の日本には、その戦争の広がりが正確に伝わっていたのである。

おわりに

以上、別段風説書における一八五〇年代のヨーロッパについて見てきた。一八四八年の「騒動」とその直後の政治的混乱とその收拾という政治過程ののち、「資本の時代」の特徴である自由貿易の進展、科学技術の発展を確認した。そして、クリミア戦争の叙述を検討し、別段風説書では触れられていないクリミア戦争の意義について述べた。

最後に、今後の課題として、以下の三点を指摘しておきたい。

一点目は、別段風説書のオランダ語原文の作成者についてである。誰がオランダ語原文を書いたのかは定かではなく、また一人というわけではないかもしれないが、以下のような特徴が見てとれる。作成者は、オランダの状況を「安寧」「繁昌」と捉え、「自由貿易」の広がり肯定的にとらえている。また、科学技術の発展については、その利便を理解しているが、ただし、科学や機械のものには詳しいわけではない。「騒動」や「戦争」については、オランダが直接関わっていない限り、客観的な視点を持つことができ、また、情報提供相手である日本が必要とするであろう情報（カムチャッカの事例）を推測し、風説書の中に効果的に配置できる。このような作成者（たち）の像が浮かび上がってくる。

二点目は、翻訳をする側についてである。電信やケープル、「袖廊」といった科学技術については翻訳に苦心しているさまが見て取れた。これは、オランダ語を日本の言葉にできるだけ「等価」なかたちで翻訳しようとする、いわば「近代的」な翻訳の態度であるといえるだろう。他方で、一八五七年のロシアの項の「自由貿易」については独自の説明を

し、また、クリミア戦争の開戦理由において「トルコ国内のキリスト教徒の信仰の自由」については訳していない。ここには、翻訳をする側の解釈の余地やあえて訳さないという（政治的な）意図を見出すことができ、翻訳者（たち）の主体性を垣間見ることができる。

第三に、「社会主義」「自由貿易」「クリミア戦争」といった、現在では一定の価値と意味が確定している概念が、それぞれが起こった当時には、現在理解されているようなものとしてはいまだ「結晶化」してはいなかったということである。「すべての市民に財産を平等に分ける党派」という言葉は、現在私たちが「社会主義」と理解しているものと考えることができるが、オランダ語原文にも「社会主義」という用語は用いられていない。これは、「社会主義」という言葉を書き手が拒否している可能性もあるが、おそらくヨーロッパでも「社会主義」という言葉が一般化はしていなかったためと考えられる。また、「自由貿易 *vijsje handel*」という概念も、他国の利益も自国の利益と同様に扱うと説明されているが、「自由貿易」という語に現在込められている概念に比べるとその意味合いが狭いと言わざるを得ない。他方、「クリミア戦争」という語で現在認識されている戦争は、実際には、クリミアに限られた局地戦ではなく、広域にわたって戦闘が行われたことが別段風説書に記されている。「クリミア戦争」という現在の概念の方が、戦争の広がりを狭く理解させてしまう可能性がある。ただし、この「クリミア戦争」は、「帝国」という概念から再度捉え直されて、この戦争の広域性が再び理解されるようになってきている。このように、*Apart Nieuws*、別段風説書と

して作成・翻訳・解釈されてきたテキストは、その当時の事件の情報だけでなく、歴史的事象や概念に関する現在の私たちの理解を問い直す契機をも与えてくれるのである。

注

(1) 拙稿「別段風説書のなかのヨーロッパ——一八四八年革命を中心に——」『風説書研究会編『オランダ別段風説書集成』（青山学院大学総合研究所叢書）（吉川弘文館、二〇一九年）所収。

(2) 別段風説書のオランダ語の原文は以下で翻刻されている。以下は原文の年代順で示す。西澤美穂子、松方冬子「一八四〇（天保一一）年の別段風説書蘭文テキスト」『日蘭学会会誌』第三四巻一号（二〇一〇年三月）／松方冬子「幻の一八四五年別段風説書とその情報源」（上）（下）『日蘭学会会誌』第二六巻二号、第二七巻一号（二〇〇二年三月、二〇〇二年一〇月）／矢森小映子「一八四六（弘化三）年の別段風説書蘭文テキスト」『洋学』一七号（二〇〇八年）／松方冬子、矢森小映子「一八四七（弘化四）年の別段風説書蘭文テキスト」『日蘭学会会誌』第三三巻一号（二〇〇八年二月）／松方冬子「一八四八（嘉永元）年の別段風説書蘭文テキスト」『科学研究費補助金基盤研究（B）（2）』『近世日本関係欧文書群の史料学的研究』研究成果報告書（二〇〇七年三月）／矢森小映子、松方冬子「一八四九（嘉永二）年の別段風説書蘭文テキスト」『論集きんせい』二九号（二〇〇七年六月）／矢森小映子、松方冬子「一八五〇（嘉永三）年の別段風説書蘭文テキスト」『東京大学史料編纂所研究紀要』第一九号（二〇〇九年三月）／金井圓「嘉永五（一八五二）年の和蘭別段風説書について」『日蘭学会会誌』第二六巻二号（一九八九年三月）／松方冬子「一八五三（嘉永六）年の別段風説書蘭文テキスト」『科学研究費補助金基盤

研究（B）』『近世日本関係欧文書群の史料学的研究』（研究課題番号一五三三〇〇七七）成果報告書（二〇〇七年三月）／西澤美穂子、松方冬子「一八五四（安政元）年の別段風説書蘭文テキスト」『論集きんせい』三〇号（二〇〇八年五月）／松方冬子「一八五六（安政三）年の別段風説書蘭文テキスト」『古文書研究』六九号（二〇一〇年五月）／松方冬子「一八五七（安政四）年最後の別段風説書蘭文テキスト」（上）（下）『日蘭学会会誌』第三二巻一号、第三三巻一号（二〇〇六年二月、二〇〇七年二月）。このほかに、東京大学史料編纂所蔵のマイクロフィルム中の史料も参照した。

(3) E. J. ホブズボーム『資本の時代 一八四八—一八七五』柳父閑近、長野聰、荒閑めぐみ訳（みすず書房、一九八一年、一九八二年）、「序言」参照。

(4) 拙稿「別段風説書のなかのヨーロッパ」、六五二—六五三頁。

(5) 矢森小映子、松方冬子「一八四九（嘉永二）年の別段風説書蘭文テキスト」、九頁。

(6) 長崎訳三七六頁、江戸訳三八六頁、松方編三三二頁。

(7) 長崎訳三九四頁、江戸訳四〇六頁、松方編二四四—二四五頁。

(8) 長崎訳三三七頁、江戸訳三五五頁、松方編二二五頁。

(9) ルイ・ナポレオンのクーデターについては、長崎訳三九三—三九四頁、江戸訳四〇五頁。

(10) ルイ・ナポレオン皇帝即位については、長崎訳四二六頁。長崎訳では、「国帝」「ナポレオンデルデ」とされている。

(11) 長崎訳四四六頁、松方編二七四頁。

(12) 一八四九年の別段風説書には、「ドイツ」について、「先年ヨリ諸邦に分別ノ処」（長崎訳三二六）、「従来久しく数国分かれたる」（江戸訳三二七）と認識されている。

(13) 翻訳語としての「共和政治」という語に関しては、橋本真吾「近世後期にお

ける対米観の形成―大槻玄沢から箕作省吾『坤輿図識』まで』『洋学』二五号(二〇一八年)参照。また、ヨーロッパの近世からフランス革命期に関する『共和政』概念については、中澤達哉編『王のいる共和政―ジャコバン再考』(岩波書店、二〇二二年)参照のこと。

- (14) エルフルト連合からオルミュッツ協定、ドレスデン会議にいたるまでについては、拙稿「プロイセン議会成立期(一八四九年―一八五〇年)におけるポーゼン問題」『青山史学』三三三号、二二―三三頁。Huber, Ernst Rudolf, *Deutsche Verfassungsgeschichte seit 1789. Bd. 2: Bismarck und das Reich* (Stuttgart: W. Kohlhammer GmbH, 3. Aufl., 1988), S. 885-925.

- (15) エルフルト憲法は、Huber, Ernst Rudolf(Hg.), *Dokumente zur deutschen Verfassungsgeschichte. Bd. 1: Deutsche Verfassungsdokumente 1803-1850* (Stuttgart: W. Kohlhammer GmbH, 3. Aufl., 1978), S. 551-556.

- (16) 長崎訳三七七―三七八頁、江戸訳三八七―三八八頁、松方編二三三頁。

- (17) 長崎訳三四〇―三四一頁、江戸訳三五八―三五九頁。

- (18) 以下は *Text* の訳に当たる語を一覧する。一八四八年・安寧(長崎訳二九三)、平穩(江戸訳三〇二)／一八四九年・靜謐(長崎三一〇)、和平無事(江戸三二二)／一八五〇年・物靜ニ有候(長崎訳三三〇)、靜謐(江戸訳三四八)／一八五一年・靜謐安全(長崎訳三六二)、(フランスについても「靜謐」(長崎訳三七六)／一八五二年・靜謐(長崎訳三九〇)、平穩(江戸訳、四〇一)／一八五三年・能く相治り(長崎訳四二三)、(ドイツについても「靜謐」(長崎訳四二六)／一八五四年・靜謐(長崎訳四四一)／一八五五年・穩尔て(長崎訳四五七)／一八五六年・国中靜謐(長崎訳四八〇)／一八五七年・無事穩尔て(長崎訳四九六)、平穩(江戸訳五一五)。

- (19) 「繁昌」に評価に関する役は以下の通り。一八五二年・商売向等誠ニ繁昌仕候儀ニ御座候(長崎訳三九〇)、国民の職業并交易も益繁昌仕候(江戸訳四〇

四)／千八百五十三年・商業渡世専ら繁昌仕候儀に候(長崎訳四二三)／一八五四年・貿易航海専ら盛尔有之候(長崎訳四四一)／一八五五年・交易及び航海の儀盛に有之候(長崎訳四五七)／一八五六年・商法航海之儀者弥繁昌いたし候(長崎訳四八〇)／一八五七年・貿易航海其余産業弥増なり(長崎訳四九八)、交易航海及び力作の産業愈盛なり(江戸訳五一五)。

- (20) 松方冬子「一八五三(嘉永六)年の別段風説書蘭文テキスト」、八頁。

- (21) 長崎訳五〇二―五〇三頁、江戸訳五二二、松方編三三三頁。

- (22) 長崎訳三六三頁、江戸訳三八二頁、松方編二二三頁。

- (23) Andreas N. Angelakis, Mohammad Valipour, Kwang-Ho Choo, Abdelkader T. Ahmed, Alper Baba, Rohitashw Kumar, Gurpal S. Toor, Zhiwei Wang, Desalination: From Ancient to Present and Future, *Water* 2021, 13(16), 2222 (<https://doi.org/10.3390/w.13.16.2222>).

- (24) 長崎訳四六一頁、松方編二八九頁。なお、日本で「ナポレオン砲」と呼ばれるものとは異なる。

- (25) この例については、翻訳の問題として、松方編の解題において触れられている。松方編一七頁参照。

- (26) 水晶宮の規模については、松村昌家「水晶宮物語・ロンドン万国博覧会一八五一」(リポポート、一九八六年)、一五三―一五五頁。

- (27) 長崎訳三九二―三九三頁、江戸訳四〇三―四〇四頁、松方編二四二頁。

- (28) 金井圓「嘉永五(一八五二)年の和蘭別段風説書について」、七二頁。

- (29) 国際電信を可能にするのに重要なのはケーブルであった。特に、ケーブルの絶縁技術の進展により、改定を通すことが可能になった。絶縁には、ゴムの一種であるガタバーチヤが用いられた。なお、原産地のマレーは、当時イギリスが支配していた。西田健二郎『英国における海底ケーブル百年史』(国際電信電話、一九七一年)、九・二〇頁。

オランダ別段風説書における一八五〇年代のヨーロッパ

- (30) 長崎訳四八三・四八四頁。
- (31) 松方冬子「一八五三(嘉永六)年の別段風説書蘭文テキスト」、八頁。
- (32) ロシア側の開戦理由として、ベツレヘム降誕教会の鍵の管理権、つまり、オスマン帝国内のキリスト教徒の保護権の問題がある。これをスルタンがカトリック国であるフランスに認めたことがロシアの不満を高めた。オーランド・ファイジズ『クリミア戦争』(上) 染谷徹訳(白水社、二〇一五年)、一七八―一八〇頁。
- (33) Winfried Baumgart, *The Crimean War, 1853-1856*, 2nd ed. (London: Bloomsbury Academic, 2020), p.17.
- (34) 西澤・松方の翻刻では、in Georgie nabij Achalzich となっており(西澤美穂子、松方冬子「一八五四(安政元)年の別段風説書蘭文テキスト」一二頁)、現代語訳もそれに従ってなされている(「アカルジツチ付近のクルジエでも」松方編二七六頁)。長崎訳も「アカルシグ^名の近辺のセオルジー^名地^示て」(長崎訳四四七頁)と同様に訳している。他方で、東京大学史料編纂所蔵のマイカルフィルムの Apart Nieuws (Hdtp. 6998-133) では、in Georgie, nabij Achalzich とコンマが入っているように見えるため、訳と指している戦いについては検討する必要がある。アハルツィへの戦い(十一月二四日)については、Dmitry Plotnikov, *Battles and military art in the Caucasian theatre of operations*, in: Candan Badem(ed.), *The Routledge handbook of the Crimean War* (London: Routledge, 2022), pp.129-130. ただし、この戦いとは別に、十一月一日にアハルツィへの近郊 Sufis (Sadzei) における戦いがありこれを指している可能性もある。Mesut Uyar, *The Ottoman officer corps and the Crimean War*, in: *The Routledge handbook of the Crimean War*, p.215
- (35) 日付は、松方編が九月二九日(二九七頁)、長崎訳が九月二五日(長崎訳四六九頁)となっている。アルマの戦いについては、ファイジズ『クリミア戦争』
- 上巻、第七章参照。
- (36) バラクラヴァの戦いの推移に「cf. Douglas J. Austin, *Better Reasons why? Captain Nolan and the Charge of the Light Brigade*, in: *The Routledge handbook of the Crimean War*, pp.141-143.
- (37) Baumgart, *The Crimean War, 1853-1856*, pp.141-148.
- (38) 遠征は五月二二日。Baumgart, *The Crimean War, 1853-1856*, pp.157-158.
- (39) チェルナヤの戦いは八月一六日。Baumgart, *The Crimean War, 1853-1856*, pp.166-168.
- (40) Alexey A. Krivopalov, *Russia's military strategy and lessons of the war*, in: *The Routledge handbook of the Crimean War*, p.52.
- (41) Baumgart, *The Crimean War, 1853-1856*, pp.248-251.
- (42) Andrew C. Rath, *The Crimean War in imperial context, 1854-1856* (New York: Palgrave Macmillan, 2015), p.117.